

○天愚孔平

天愚も某候の藩裡で赤坂御門の御第舎に住し俗稱款野
喜内名の信敏字の孔平別号天愚とて鳩谷ともいふ博識
文章秀世と玩弄し節儉やと家これ富りあり敵衣

破るはと著し家在此ら大橋のうち座して書見は右左
倚羅とてあり心散りて書と看み大いふとあり亦佳
来はるはと晴雨ふかやうに羽織と着はるはと戯れといふ
あは歩行羽織といふものありと赤路頭ふ人の脱すといふ古草履草
鞋とて破るはと自親ひひ把て家ふかやと是と幾重もさう
合せやと他ふ出ると是と足ふはとていふ最異人あり途ふ
さうさうと靴も拾ひて用はるはと斯のて要する我の世も磨る
ものと擧用するはと好むありといひて彼と著る古草鞋と
もれて往來し看人とも笑ふといふ狂人の如く思ふ人も
ありといふ會て談話とて其論とて博識あり方あり

壯年より四方の神社佛閣ふらふとれは管に堂塔と題名
してかゝる変とて其筆硯のつづつとれといふ後六印
刻して天愚孔平と紙ふらふとて是とて歩行あり奈何
あは天愚といふ唱ふとて問ふ我天性愚ふ生るはと天愚
といふ呼ありと答ふはと這紙おのりあり古れ堂社ありと殘
しり是と看真似して世の凡俗千社ありのれといふと云
夏流行のぐの神社佛閣と活しありと者多し數
れ夏ありか

大槻玄沢の孫大槻如電筆

少年讀本第五十篇 大槻如電筆 東京博文館、明治三十五年刊

蘭學階梯の序文を書きたりし萩野鳩谷はさのみ知友とは思
はねど世に名高き奇人なれば一の談柄として其異聞を記さん
此人は世に多く其狂態を傳ふれども序文の達見中々以て侮る
可らず而して其狂人じみたる所行は自ら原因あるなり
鳩谷は出雲侯の臣にて家祿は三百石なり通稱は喜内名は信敏
その祖先是支那の孔子より出づればと孔平と自ら字せり豪
毅にして學識あり時の主君殊に驕奢に耽けりしかば鳩谷は
諫む侯改めず一日苦諫せしに侯の言るやや凡人の性質
は天より稟る者これを變せん事なし能うべきや汝は賢なり才
なりされど其賢を愚にし其才を鈍にし得べきや鳩谷黙して
退き是より放心せし者の如く種々の狂態奇行を現したりとぞ
侯は鳩谷の所行を見て其曾て言ひし語を省み深く耻ぢらひや
がて其行を改め侍臣をして前過を謝さしめ舊の如く政事を補
翼せよと告ぐ鳩谷は命の忝きを拜せども依然として狂態を改

水 壁 楓 大

めずかの路上に於て廢れたる草鞋を拾ひ集めまた干社參こて
神社佛閣へ札を貼るなど日々の業の如くこれを行ふ或人その
伴狂を罵る鳩谷曰く我は君命を奉じて其天性を變ぜるなり我
は君を偽らず又我をも欺かず身は此愚境に終へんのみと天愚
孔平を自稱したりと云ふ其語を轉じて天狗とも呼びしなり
此時の雲州侯は例の不昧公(治卿)ならんと思へども此公は十
六歳にして明和四年に家督す鳩谷が六十歳の時に當る其先
侯南海公宗衍は三才にて家を繼ぎ三十九歳にて致仕す此人
なるべし鳩谷は文化十四年四月歿百十歳の長壽に躋れり

彼れが長壽の秘訣として云ふ所は、曰く、女色を遠ざけること、曰く、浴湯を避くることの二つである。成程、性慾を抑するは養生法とも云へるであらうが、浴湯を禁ずることは、如何なものであらう。彼れは、どれほどの程度に此の秘訣を實行したものか。其の澤山の子のある所から見ると、女色を絶対に遠ざけたとも思へぬ。併し、浴湯は嫌つたと見えて、彼れの皮膚は常に垢を以て汚れ、近寄るものは、臭氣の粉々たるに鼻を掩うた位で、此の人に訪れられた家では、此人が去ると、掃除をして塵をまいたと云はれて居る。して見ると、第二訣だけは嚴重に守つたものか。

唯一の例外

なんでもかんでも脱線せざれば、承知せぬといふ畸形の人物だが、唯書道に於てだけは、毫も脱線せず、ゆがみも狂ひもせず、極めて嚴正であつたのは、寧ろ意外である。

書道に於て、此人は今忘れられて居るが、當時は識者が許した程のもので、今日でも書道の研究家は大家と許して居る。彼れの書の優れたのは其の天分にも依るだらうが、其の血統中に能書の人も居つたのである。彼れの祖父はやはり出雲藩の御側衛であつたが、其門下から、一時書を以て天下を風靡した細井廣澤が出て居る。廣澤は、實に書を孔平の祖父に學んだものである。されば、孔平は能書の血を受けて生れたと見て差支へなからう。

彼れの家が、前代より書道の家であつたことは、岡立約が、孔平の著「學書捷徑」に序した文章に見えて居る。云く、「我邦には學書の法が傳はらないが、ひとり鳩谷孔平先生の家には、文徵明の法が傳はつて居る。而して之を斟酌し、始めて正法を立てたものは先生である」と云うて居る。これに依つて見ると、萩野の家では、祖父の頃から文徵明に私淑し、書法に於て人に許されたものと想像が出来る。又孔平が、三代の内、

特に出色であつたかの如くにも想像される。

彼れにはいろいろの書畫もあるが、殊に書道の著書が鮮くない。前に挙げた「學書捷徑」は、一名「手習はやみち」とも云うて、深切に初學を導き、當時大いに流布した書である。此外に「揮毫捷徑」「書家微言」「臨池正眼」「筆硯使用」などの著書もあるが、何れも今は極めて稀本となつて、容易に得ることが出来ぬ。併し、是等の書は、何れも立派に其の本領を發揮したものである。

彼れは當時書に於て天下第一と自負し、眼中に己れに優る書家は無いと誇つた様である。併し、雪山人だけには一目を置いて居つたらしく、自著の中には、誰をも褒めて居らぬが、雪山人だけは賞揚し、且つ此人の書を、多く家に藏して居ることを云うて居る。

彼れの書は、今多く見ることが出来ぬ。前に陳べた千社納札の文字は、自筆に相違

なく、外に一二書簡を見たことがある。是等に據り直ちに彼れの眞面目を窺ふは、早計かも知れぬが、唯に能書である。彼れは各體をよくした。中に殊に草體に妙を得たと云はれる。彼れの筆力は如何にも遺憾で、酒脱の處に味があつた。彼れにも、張旭の如き酒量があつたかどうか知らんが、其の風格が何となく似た所があり、其の草聖たる所、酷によく似てをる。

孔平は種々の點にゆがむで居るが、其本領だけは流石にチャンとしたものである。彼れは納札の開祖と俗間に崇められて居るが、書道の達人たることは、納札連中多く知らぬ。彼等、書道の神たる菅公を遠く廻つて祀らんより、手近く己が趣味の開山たる天愚公を祭るが捷徑である。これ程の畸人を、終生棄てもされなかつた不昧公は、その雅量にも因つたことであらうが、彼れが書道に秀でたる長所は、恐らく君侯の寵眷を博した大なる原因であらう。

